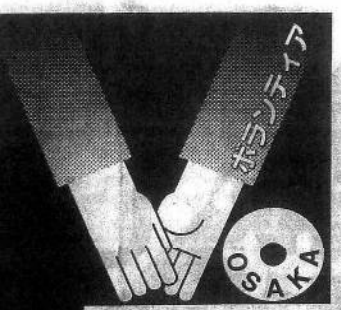
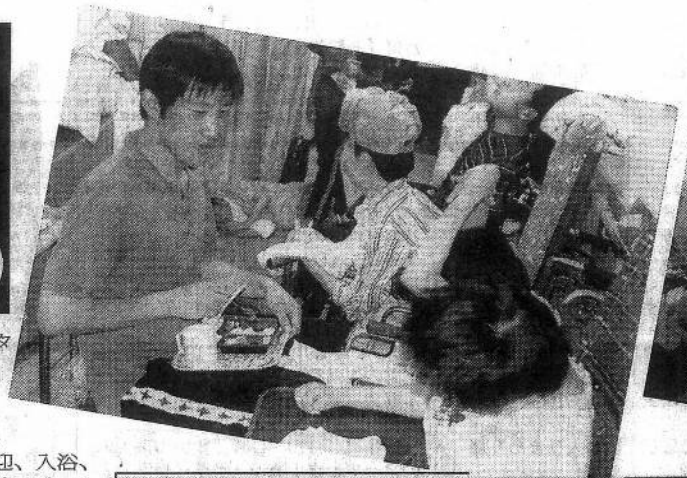



# 小規模作業所で働く韓国の若者たち



20歳代の若者が外国で働きながら1年を過ごす「ワーキング・ホリデー」。この制度で韓国から来日した若者たちが大阪市内の小規模作業所で働いている。無償のボランティアではなく、バイト料の出る〝仕事〟だが、彼らは障害者のケアに熱心に取り組んでいる。韓国と比べ、街に出る障害者が多いと言い、保護者の明るい顔に驚く。介護の体験のなかった若者もいるが、「帰国したらボランティアとして活動したい」「こんな施設をつくりたい」と、日本で新たな目標を見つけたようだ。

【池内敬芳、岸桂子】

## 心の交流　母国の明日を担う笑顔

### 夢飛行——西成区

西成区の「デーセンター夢飛行」（06・6659・6612）では、陳任徹さん(28)と裵賢善さん(26)が働いている。

仕事は、利用者の送迎、入浴、食事の世話のほか、一緒に歌ったり、散歩に出掛けたりと、何でもこなさなければならない。重症の心身障害者である利用者が何を望んでいるかを見極める目と、それに応える体力が必要だ。

◇

陳さんは昨年8月に来日。東京のワーキング・ホリデー協会で求人票を見て、働くことを決めた。陳さんは「障害者とか、福祉のこととか、何も知らなかった」と振り返る。

高校時代から日本語を学んでいたため、言葉の面ではほとんど問題はなかった。それでも仕事に慣れるまで3カ月かかったという。「体と体で気持ちが伝わることに気がついた。心を開いて利用者に接して、少しずつ分かりあえるようになった気がします」

◇

大学生でクリスチャンの裵さんは昨年12月に来日した。大阪市内の教会を訪ねた時に、この仕事に誘われた。「福祉施設を訪問した経験はあるが、こんなふうに一日中介護するのは初めて。慣れるのに1カ月かかった」という。

裵さんは「利用者一人一人、求めていることが違う。それに応えるのは難しいけれど、やりがいもある」。帰国したら大学に戻るが、「いつかここでの経験を生かしてボランティア活動してみたい」という。

### 「体と体で伝わり合うんだ」——陳さん

### この経験 活動に生かしたい——裵さん

### モモの家——福島区

福島区の「デーセンターモモの家」（06・6465・9133）では、女性の孔恵琳（コウヘーリン）さん(30)が勤めている。孔さんは、知り合いの陳さんからこの仕事の話を聞き、ワーキング・ホリデーの年齢上限となった今年5月に来日した。

孔さんは学生時代に幼児教育を専攻した。幼稚園教諭のほか、知的障害がある子どもの施設で働いた経験もある。2年前に旅行で神戸に来たとき、街で多くの障害者や車いすに乗った人を見かけてショックを受けた。「日本は先進国だなと思いました。それで進んだ福祉施設がどんなものか、見たいと思いました」

孔さんは、利用者の母親の笑顔に驚いているという。「私が前にいたのは子どもの施設。こちらは18歳以上で、年齢が違うこともあるでしょうが、韓国ではお母さんの明るい顔を見たことはなかった。こちらのお母さんも大変なのでしょうが、支える仕組みや意識は、日本の方が進んでいると思います」

仕事を辞めて来日した。帰国後のことは決まっていない。でも「いつか、ここで習ったことを生かして、韓国でこういう施設を作ってみたい」と、目を輝かせた。

◇

「夢飛行」と「モモの家」では、昨年5月以降、帰国した人を含め、働いた韓国人は計6人にのぼる。小規模作業所にはスタッフを好条件で雇う経済力はなく、ボランティアにも限りがある。慢性的な人手不足の中、まじめに障害者のケアに取り組む彼らは、貴重な存在になっている。

一方、ワーキング・ホリデーで来日する韓国の若者にとっても働く場所は大切だ。英会話講師などの募集が多い英語圏の国の出身者に比べると、雇ってくれるところが少ないという現実がある。

◇

### こういう施設作ってみたい——孔さん

### まじめな姿に活動の原点見た

両作業所を支援するNPO「W・I・N・G—路をはこぶ」代表の菅野真弓さんは「彼らのまじめな姿勢にハッとした。日ごろの活動で忘れていた、心と心で対話していこうという態度が良く表れています。それは私たちの原点です。これからも多くの韓国の若者に来てもらいたい」と話す。

菅野さんは最近、韓国語を学び始めた。利用者と一緒に韓国旅行し、行く先々で元スタッフが支えてくれる——。そんな夢を見ながら勉強しているという。

社団法人日本ワーキング・ホリデー協会や外務省によると、現在、日本が制度提携しているのはオーストラリア、ドイツ、韓国など7カ国。韓国との交流は99年から始まり、昨年は973人にビザを発給した。入国後の活動・働き先は、個人の計画にゆだねられているためデータがないが、双方とも「障害者作業所のボランティアというのは聞いたことがない」と話す。

定住外国人との共生を目的に医療相談や情報提供などを展開している多文化共生センター（東成区）の田村太郎代表は、「外国人だから母国語を生かす場所がいいとか、外国人だからお客様として扱わなければ失礼、という考え方はもう必要ない。この作業所のように、国籍を超え、個性に合わせて活躍出来る場が各地で広がれば、相互理解も深まるだろう。日本人ボランティアが海外で活躍しているのだから、外国人も気軽に参加してもらえたら」と評価したうえで、「日本人ボランティアが、重度障害者作業所にはあまり集まらないなどの問題が背景にあるとすれば、手放しで喜ぶことは出来ない」と指摘する。

### 活躍の場広がれば 相互理解も深まる

おことわり　ヘルシー料理は23面に掲載しました。

◎利用者の食事の世話をする陳さん（左）「ごはん、おいしいね」。2人の利用者にはさまれ、交互に食事の世話をする孔さん＝「モモの家」で

毎日新聞（6月30日付朝刊）で、ワーキングホリデーの若者たちが紹介され